



経済産業省「未来の教室」実証事業やEdTech導入補助金の好事例を配信するニュースレター／

未来の教室 通信

Standard

Vol. 16

GIGAスクール環境を活かして先生と生徒達がEdTechを使って創る、「新しい学び方」のモデルをお届け！

Vol. 16

「教える」を手放し、生徒が「没頭」する授業を創る

ミネルバ式
トレーニング
実証校紹介

CONTENTS | ● ミネルバ式トレーニングとは？ | ● 先生のインタビュー：01_小島教諭…p.3-4 02_福島教諭…p.4-5 03_町田教諭…p.5-6

先生が喋っているのは授業時間の20%!? ミネルバ式トレーニングとは？

「先生が喋っているのは授業時間の20%まで。80%は生徒同士の議論で進めてください。」

これは、経済産業省「未来の教室」の一環で行われた、「探究学習の指導・伴走法」を教える教員向けのプログラムの一コマです。参加しているのは全て現役で教壇に立つ高校の先生たち。進行役から声がかかると、オンライン上に集まった参加者は先生役と生徒役に分かれ、模擬授業を始めます。

この日のテーマは「どうやったらすべての生徒が75%以上の時間、授業に能動的に参加している状態をつくり出せるか」。先生たちはあらかじめ、脳科学や心理学といった学習科学に関する論文を読み、必要な情報をインプットした上で授業に臨む「反転学習」※1を実践します。まさに、先生が知識を受け取るのではなく、学習者が中心となって進める授業です。

模擬授業の後、先生役の先生は自分の喋った分量を確認することができます。「チョーク(板書)&トーク(講義)」に慣れているだけに、「つい喋りたくなるんだよね」と苦笑いする先生も。さらにこの模擬授業では生徒役も気が抜けません。モニター上には各生徒の発言も色分けして表示され、授業後には発言の内容が評価の対象になるからです。対面と変わらない熱気で、先生役も生徒役も皆集中して取り組んでいる様子でした。

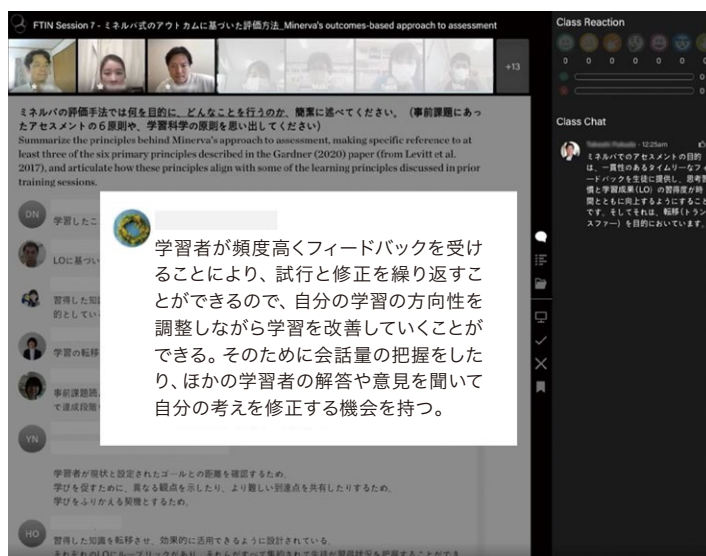
探究学習の重要なキーワードでもある「オンライン」「反転学習」「アクティブラーニング」を一気に体験して学べる「教員向けミネルバ教授法トレーニング」。ハーバード大学やスタンフォード大学などよりも難関と名高い、ミネルバ大学が提供する教育プログラム(ミネルバ教授法)を日本向けにアレンジしたものです。

ミネルバ大学は、アメリカで2010年半ばに設立され、独自のキャンパスを持たず、全授業がオンラインで行われます。同

時に、学生たちは4年間で世界の7都市を移動しながら各地でPBL※2として社会貢献活動にも従事します。世界中からこのユニークな学習スタイルに興味を持つ一流の教員が集まり、さらに学費が安く抑えられることもあって、開校早々入学倍率はハーバード大学を超えるほどでした。

ミネルバ大学の最大の強みは、教育のほぼ全てが学習科学(脳科学や心理学)に基づき、最先端のテクノロジーによって組み立てられている点にあります。その結果、教え方、学び方とも最大限に効率化できるのです。

「従来の一斉一律の授業形式だと、脳は教わったことの9割をたった3日で忘れてしまうことがわかっています。だからこそミネルバ教授法では、生徒が新たな知識を『知った』『分かった』という受け身の態勢では終わらせません。どうやって学習内容に没頭させるか、また、机上で得た知識を日常でどう使うか(=「学習の転移」(transfer))に主眼を置き、学



アクティブラーニングに対応した評価手法をオンラインで学ぶ先生方

※1 反転学習とは、授業と宿題の役割を「反転」させ、知識・技能の習得は授業時間外(家庭学習)に移行し、教室では活用・探究のための課題解決学習や協働学習といった学習活動を中心に行う授業形態のことを指す。[出典：稲垣忠(2019)『教育の方法と技術』(北大路書房)]

※2 PBL(Project-based Learning; 課題解決型学習)とは、生徒が自分にとって重要で、リアルで有意義な問題に取り組む学習形態のこと。生徒は、問いを探究し、仮説を提案し、アイデアについて議論し、新しいアイデアを試すことに取り組む。[出典：Joseph S. Krajcik and Namsoo Shin, 河崎美保(訳)「課題解決型学習」(学習科学ハンドブック第14章)]

習と実践を繰り返します。それによって、どんな生徒でも見違えるほど飛躍的に成長できるのです。」(ミネルバ大学を運営するミネルバ・プロジェクト社のパートナー、リクルート「HITOLAB」の福田竹志氏)

ミネルバ教授法のトレーニングには、教員向けと生徒向けのプログラムがあり、冒頭に紹介した教員向けプログラムは、模擬授業を含めた約90分×10回程度のオンライン双方向型トレーニングです。その内容は以下の3つの要素から構成され、実践を通じて学んでいきます(実際の授業への活かし方は▶参加した教員のインタビュー P3-6 を参照)。

1. 授業の計画：授業毎に達成したい学習目標(Learning Outcome)を立て、学習科学(脳科学や心理学)の知見に基づいて授業を設計する
2. 授業の進行：発言量や意見を可視化するなど、生徒一人ひとりが能動的に参加できる仕組みや問いかけをつくる
3. フィードバックと評価：事実に基づいた頻繁なフィードバックと、発言量や意見の記述内容などから習熟度の評価を行い、成長を後押しする

ディスカッションテーマ例

シナリオ(状況)

- ◆ あなたは先生として、その日のレッスンプラン(授業設計)を2つの活動で構成していました。
- ◆ 「活動1」はディベートでした。生徒たちはデリケートな話題を扱い、討論は非常に魅力的で白熱しています。しかし、生徒たちは与えられた時間を超えて議論を続けようとしている状況です。
- ◆ 次に行う予定の「活動2」は、その日に達成したい学習成果に関連する重要な内容を扱う予定となっています。

問い(議論テーマ)

生徒の気持ちを理解しつつ、次の問いも念頭に置いた上で、「活動1」から「活動2」への移行をどのように行うか、あなたの解決策を説明してください。

- ◆ 「すべての生徒が75%以上の時間、授業に能動的に参加している状態(アクティブラーニングの原則)」をどのように維持できるか
- ◆ レッスンプラン(授業設計)の「核」をどのように維持できるか

ミネルバ式
教員向けトレーニング

今、教育界でこのようなトレーニングに期待が集まる背景には、日本の教育が対話的な学びや探究学習などへと大きくシフトしている中、学校現場で「目指している方向性には共感するが、具体的に何をすればいいかわからない」と戸惑う声が後を絶たないという現実があります。

福田氏はこれを「先生自身が受けたことのない教育なのだから、わからないのは当然。だからこそまずは教え方・学び方がどう変わるのかを実体験することが一番の近道ではないか」といいます。

「先生自身がこのミネルバ教授法のトレーニングを体験すれば、オンラインやアクティブラーニング、反転学習といった新しい教育の手法を、『知っている』『理解している』から『教えられる』という日常で『使える』レベルにまで到達できます。まさにこれはミネルバの目指す『学習の転移』であり、探究の神髄そのものなのです。」(福田氏)

研修に参加した先生の声

- ◆ これまでの知識伝達型の授業スタイルが終焉を迎えること(本当はもう終焉を迎えていること)は間違いないことを実感した。
- ◆ 教師がファシリテーターとなることで授業のクオリティが高くなることを経験でき、凝り固まったマインドセットを変えるのに大きく役立つと思う。
- ◆ オンラインでも双方向で深い学びができるということを今回実感した。感染が拡大して対面での実施に不安を感じている今こそ、新しい取り組みに挑戦できるチャンスではないか。

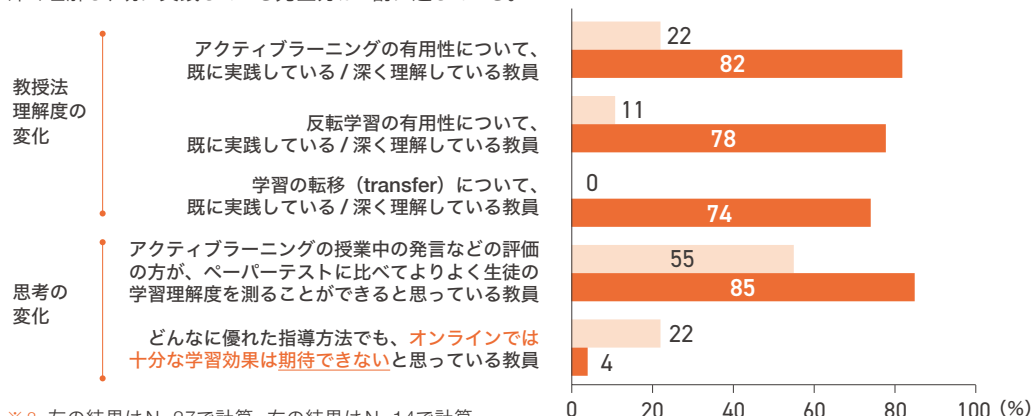
教員向けトレーニング後に変化したこと

[次頁へ続く](#)

- ◆ 教えるよりも、考えさせるということを中心においた授業へと変更していている。生徒同士の教え合いを指示することは苦手だったが、今では学習目標を生徒に提示し、問い・考え・教え合うといった協働学習を授業に取り入れている。

「未来の教室」実証事業でミネルバ式教員トレーニングに参加した先生方の変化※3

トレーニング後、アクティブラーニング・反転学習・学習の転移といったキーコンセプトを深く理解し、既に実践している先生方が7割に達している。



※3 左の結果はN=27で計算、右の結果はN=14で計算

トレーニング修了3か月後の追加調査の結果※3

一過性のトレーニングでなく、教育・指導法に対する思考や実践に大きな影響を与えたことが分かった。

教員向けトレーニングの結果、指導法や教育に対する考え方に**変化があった**

94%

教員向けトレーニングは、教育・指導法の**実践に役立った**

88%



◆ 正解の無い問いを立て、その回答を生徒同士が共有・議論する場面を設けるようにしている。これを単元や各パートの導入段階で行うことが、ある意味で反転授業のような形になっており、生徒自身がこの単元やパートで何を学ぶのかという意識付けになっている。

◆ 1つの授業に対する向き合い方が変わった。学習科学の原理原則や学習の転移などを意識しながら授業を行うようになった。また、学習目標を達成するためにどのような手法やアクティビティを使うのが有効かを考えながら授業を組み立てるようになった。

★ ミネルバのトレーニングの成果を自身の授業に活かした先生のインタビュー

01

INTERVIEW

小島教諭 [高知県立清水高等学校]

高知県土佐清水市にある高知県立清水高等学校(以下、清水高校)は、太平洋に突き出る足摺岬に程近く、全校生徒が100名弱という小規模な高校です。同校で理科を教える小島教諭は、ミネルバ教授法のトレーニングが「コロンブスの卵」だったといいます。

「生徒1人に一台のクロームブックが行き渡り、いよいよ授業で本格的なアクティブラーニングをやらなければならないという使命感は自分なりに感じていました。そのためには何かを変えなければいけない。ところがどうやって変えていいのか今ひとつイメージが湧かなかったんです。そうやって行き詰まっていた自分に、ミネルバのトレーニングはアクティブラーニングの一步先を見せてくれた気がします。」(小島教諭)

小島教諭はトレーニングの成果を活かすため、「せっかくなら誰でも気軽に使えるような授業の雛型をつくりたい」と考えました。そこで、トレーニングで使用されたミネルバ独自のプラットフォームをあえて使わず、Google Workplace for

EducationのGoogleドキュメントにミネルバのエッセンスをふんだんに取り入れることで、汎用性を高めることにしました。

まず、授業の冒頭には、その日の学習到達目標を共有し、Googleフォームで学習内容への事前の理解を問います。次に、ドキュメント上に貼り付けた動画を生徒が各自で再生し、要点をノートにまとめさせ、基礎知識を学ぶという流れに「反転学習」の要素を組み込みます。その後は生徒同士の議論による学び合いによって理解を深めます。最後は、フィードバックと振り返りを行うという完全なアクティブラーニングの構成です。これをGoogle Classroomで共有すれば生徒は復習しやすく、欠席しても後で見返すことができるという仕組みです。

「オンラインで繋がれば複数の高校で同じ授業を展開でき、教員の負担を軽減しながら授業の質を高めることができます。先生はどこにいても教えられるので、少子化による廃校の必要もなくなるかもしれません。」(小島教諭)

この流れからもわかるように、小島教諭はほとんど教える出番がなくなりました。授業は「教師が『教える』から、生徒たちが『自ら学ぶ』授業へ」と大きな変化を遂げたのです。

「生徒のために教える技術を磨いてきた自負がある」という小島教諭ですが、「一番重要だと信じていた教える技術を思

01

LESSON

完全アクティブラーニング型授業の雛型

作○小島教諭

手順	先生	生徒
①	授業の最初に前回の復習を共有	-
②	学習ポイント(その授業で到達する学習目標=Learning Outcome)の共有 ・例 学習目標「免疫・生体防御とは何か、自分の言葉で説明できるようになる」 事前質問を書いておく。それぞれの回答はお互いにオンライン上で共有可能。 ・例 風邪を引いたら何をしますか? 回答例:寝る、風邪薬を飲む、体を温めるなど	-
③	ドキュメント上にYouTubeの動画を貼り付ける ・例 有名講師による講義動画を採用	各自のペースで動画視聴。個人ノートを作成し、Google Classroom上で共有 ・例 生体防御の仕組みを説明した動画を見る

手順	先生	生徒
④	-	終了後、ワーク内容を生徒同士がディスカッションしながら取り組む ・例 ワーク内容「風邪薬を飲むと風邪が長引くのはなぜか？」
⑤	-	②で掲げた学習目標に立ち返る。学んだことに加え、自分の心が動いたこと、感じたことを振り返って文章にまとめる(80文字以上を推奨)

② 動画視聴 + ノートづくり

■【生物基礎】 体内環境の維持 自己と非自己 (12分)

③ ワーク
p50 (1) ~ (5)

④ 質問に答える

1. 風邪のひきはじめに起こる症状にはどのようなものがあり、3段階の仕組みのうちの仕組みがはたらくいと考えられるか。

2. 風邪薬を飲むと風邪が長引く場合がある。それはなぜか。

評価点

1. 内容が適切に説明できていない。
2. ある程度説明はできているが文章が十分でない。または教科書などのコピペになっている。
3. 内容が授業の内容を踏まえ、文章でしっかり説明できている。
4. 内容に加え、自分の考えがプラスされている。
5. 内容・自分の考えとともに優れている(新たな発想・おもしろい発想)

生徒に共有した
Googleドキュメントの
内容の一例



左：1人1台端末で学ぶ清水高校の生徒の様子、右：授業中に学び合う清水高校の生徒の様子

い切って手放したら、生徒同士が自然に学び合いながらゴールに向かい始めた。生徒たちが主体的に動ける流れをつくただけなのに、生徒からの反応が良くなっただけでなく、定期テストの成績までアップした」と驚きを隠しません。

さらに、自分自身の変化についても次のように語ります。

「ミネルバ式だとオンラインで生徒の意見を共有するので、『おとなしいけれどこんな深い考えを持っていたのか』とか『勉強嫌いに見えたのに実は好奇心が旺盛なんだな』など、これまで気づけなかった生徒の新たな一面をたくさん発見できるんです。また、授業毎に生徒一人ひとりの振り返りが見

られるので、改善点も具体的にわかります。もはや教員は教えることが主な仕事ではなくなる時代になっているなあと実感しますね。」(小島教諭)



Vol.16 高知県立清水高等学校

土佐清水市に所在する1949年設立の公立高校。自由・平等・博愛・寛容を校訓とし、ジョン万次郎の縁から、米国マサチューセッツ州フェアヘイブンとの交流を続けている。現在、21世紀のジョン・マンを育成するための新たなカリキュラム開発に取り組んでいる。

02 INTERVIEW 福島教諭[高知県立佐川高等学校(定時制)]

高知県高岡郡佐川町にある高知県立佐川高等学校(以下、佐川高校)は、全日制は清水高校と同規模ながら、定時制はわずか16名。この定時制で理科を教える福島教諭は、ミネルバのトレーニングの中から「学習の転移」という概念にフォーカスしました。学んだ内容がテストの暗記のためではなく、社会の様々な場面に当てはめることで真の学習成果を生むという考えです。

「定時制には、小学校・中学校時代に基礎学力がほとんど身につけられなかった生徒もいます。そこで僕が、板書して説明して、それをノートに書かせるっていう一般的な授業をやったところで質問も出ない。はなから『学校の勉強なんて何の役に

立つの?』と思われるだけに、知識を授けるだけでは誰も面白がってくれません。だから『こんな授業をやっていて意味があるのか』とすごく違和感を感じていた矢先に、ミネルバのトレーニングで『学習の転移』という概念に出会い、これだ!と思いました。知識が実社会にどう活かされているかを意識させると学ぶ意欲が掻き立てられると知り、自分の授業で試してみる価値があると思ったのです。」(福島教諭)



福島教諭は授業の冒頭、その日の授業に関する基礎知識を1枚のプリントで説明した後、それに関連したユニークな問いを投げかけます。例えば火山について学ぶ際には、次のようにたずねました。

「あなたは火山のある島で街づくりを任せられました。多くの

02

LESSON

「学習の転移」にフォーカスした探究型授業の流れ 作○福島教諭

手順	先生	生徒
①	テーマの共有	-
②	テーマに関する基礎知識の共有(教諭のプリントと短い講義)	-

Google
ドキュメントを活用した
レポート課題の例

火山レポート
あなたは、火山がある島での街づくりを任せられました。多くの人が「ここに住みたい!」と思うような魅力的な街を作るためにはどのような工夫をしますか?
具体的に書いてみてください。
※ 火山のメリット・デメリットに触れること。
※ 自分の考えを書くこと。 ※ 1200文字以上書くこと
【質問】
・まず、どのような街を作りたいかを分かりやすく記述する。
・次に、火山について勉強したことや調べたことを踏まえて、その街を作るために必要なことや問題点、その解決方法を記述する。
・最後に感想を書く。
氏名:

手順	先生	生徒
③	問いを投げかけ、下記の形式で生徒にレポートを課す ＜形式＞ ・「火山がある島のまちづくりを任せられた。あなたならどんな街をつくるか?」 ・火山のメリット・デメリットに触れること ・現実的な内容で自分の考えを書くこと ・1,200文字以上書くこと	レポートをまとめる ＜書き方＞ ・まず、どのような街をつくりたいかをわかりやすく記述する。 ・次に、火山について勉強したことや調べたことを踏まえて、その街をつくるために必要なことや問題点、その解決方法を記述する。 ・最後に感想を書く。
④	レポートをルーブリックで評価し、フィードバック	アイデアの共有

上：基礎知識(風化、浸食、運搬、堆積)の例をオンライン上でアイデア出しする生徒たち、下：生徒による授業の振り返りと先生からのフィードバック

のコースをつくるとか、アニメとコラボしたお土産やインスタ映えスポットをつくるとか、アイデアは生徒ごとにバラバラで面白かったですね。授業後の感想では、『いろいろな考え方があることを知って勉強になった』『身近な例で考えたら火山のこともわかるようになった』といった前向きなコメントが多く、生徒たちの学びへの意欲が垣間見られました。(福島教諭)

「学習の転移」を意識した授業をやってみて福島教諭が一番驚いたのは、生徒たちのアウトプット力が飛躍的に伸びたことです。

「文章を書くのが苦手で、入学当初は1行すら書けなかった生徒が、今ではA4一枚くらいのレポートを書いてきます。普段あまり喋らない生徒も、書くことで自分の考えを表現してくれるので、こちらも文章を通じて褒めたり、改善を提案したり、生徒たちとの双方向のやりとりがこれまで以上に多く生まれるようになりました。手本があるわけではないので、問いを立てる難しさや準備の大変さはありますが、授業が随分と活気付いたという手応えは感じています。」(福島教諭)

人が住みたいと思う魅力的な街をつくるためにはどうしたらいいですか？」

もちろんこの問いに正解はありません。だからこそ生徒はのびのびと自由に思考を巡らせます。

「バイク好きな生徒は道路の下にお湯を通す配管を整備し、雪が降っても積もらないような構造にした上で、ツーリング

Vol.16

高知県立佐川高等学校(定時制)

江戸時代の名教館より続く文教の町佐川で、大正11年(1922年)に佐川高等女学校として創立。1万人を超す卒業生を輩出し県下有数の歴史をもっている。「いのち輝け」という校是のもと、生徒一人一人が自分の良さや力を認識し、自らの生き方を自らの力で切り開いていける人間を育てることを目指している。

★ 生徒向けミネルバ授業に取り組んだ先生のインタビュー

03 INTERVIEW 町田教諭「高知県立山田高等学校」

一方で、小島教諭、福島教諭と同じく、教員向けトレーニングを受講した高知県立山田高等学校(以下、山田高校)の町田教諭は、ミネルバが高校生向けに開発した「脳科学をベースに、学び方を学ぶ」という授業を5



回に分けて実施しました。山田高校は全校生徒が約300名。令和2年度にはグローバル探究科を新設するなど、以前から探究活動には積極的に取り組んできた学校です。こちらは経済産業省の「未来の教室」実証事業の一環として、リクルート社の協力の下、ミネルバ独自のプラットフォームを使って行われました。

03

LESSON

高校生向け授業「脳科学をベースに、学び方を学ぶ」のレッスンプラン

第1回「脳の実行機能」とは何か？

人間の思考や行動に、脳はどのように働くのか。
3つの主要な機能を見ていく(以下第2～4回)。

第2回「認知的柔軟性」とは何か？

柔軟な思考ができるとはどういうことなのか。
できないとどうなるかを考える。

第3回「ワーキングメモリ」とは何か？

何かの作業をするときに、短期的に覚えておく機能はどんな役割を果たしているのか。それを鍛えるにはどうしたらいいかを考える。

第4回「抑制の制御」とは何か？

やることの優先順位をつけ、欲求を一時的に抑えることにはどんなメリットがあるかを考える。

第5回「グロースマインドセット」とは何か？

自分の考えを変え、柔軟に成長していくことは可能か。成長マインドセットといわれるものの内容とその活用の仕方を考える。

※ 反転学習のため、各セッションには事前課題があり、あらかじめ資料を読んでおくことでクラスの議論が有意義なものになる。

町田教諭の担当は音楽。この授業を実施したいと思ったきっかけは、「ミネルバのトレーニングの中で、『脳の実行機能はオーケストラの指揮者のように働いている』という説明にピンときた。自分の脳がそんな高度な働きをしていることに、生徒たちも目を向けてほしいと思ったから」と語ります。

当初、生徒たちは、「脳の勉強ってどんなことだろう?」「テーマが難しそう」「理解できるか不安」など期待と不安の混じった表情を浮かべていました。それでも町田教諭は、「教員向けトレーニングで先生役も生徒役も経験していたので、授業がどんなふうに進んでいくのかのイメージはできていた」といい、ミネルバの設定したLESSONプランを信じて進めていきました。すると町田教諭の見立て通り、いざ始めると、見事に生徒たちは授業にぐんぐんと引き込まれていったのです。

例えば第2回の「認知的柔軟性」を学ぶ際には、次のような問いが投げかけられました。

「札幌の冬。家の外に締め出されてしまい、凍えている。この場面であなたならどうするか?」

予習課題で学んだ脳の働きの知識を使いながら、生徒一人ひとりが自分なりのアイデアを捻り出します。回を重ねるごとに、大人が思いもつかないようなアイデアが出るなど、どんどん活発な議論が交わされるようになりました。

「予習課題でわからないところがあると早めに教室に来て教え合う姿も見られました。授業が終わると皆ぐったりするほど、今日は難しかったとかあつという間だったとか言いながら、達成感を感じている様子でした」と町田教諭は目を細めます。

さらに、この一連の特別授業が終わった後も「学習の転移」は確実に生徒の中に浸透していました。ある大きな課題にチャレンジすべきか悩んでいた生徒に、町田教諭が「グロースマインドセットだよ」と一言声をかけただけで、「あ、そっか!」と目を輝せる瞬間があったといいます。

「気合いとか根性論ではなく、脳の働きとしてのアドバイスだと、生徒は魔法をかけられたみたいにとんと納得して自分から前に動き出せる。これには私も感動しました。」(町田教諭)

音楽の授業でも「この曲をやってみよう」と町田教諭がゴールを見せただけで、「こんな表現したらもっといい音色が出るんじゃない?」「その音をあなたは大きく、私は小さく」などと言いながら、自分たちでアイデアを出し合い、工夫し始めたという山田高校の生徒たち。「生徒たちが勝手に自走するようになって、もう私の出る幕はないなという感じです(笑)。」(町田教諭)

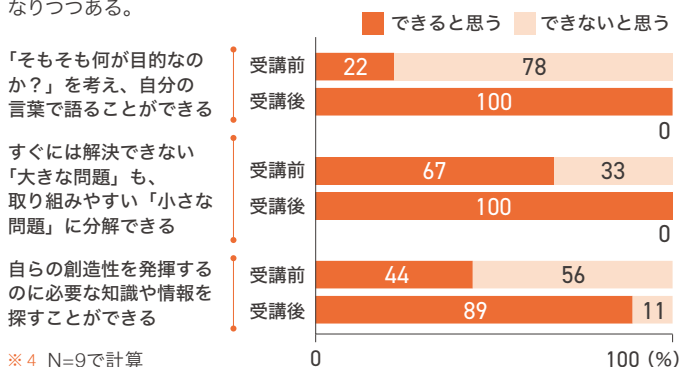
山田高校の生徒による授業の感想

- ◆ 知識を得るだけでなく、柔軟な考え方を学び、多方面から課題に向き合うことができた。
- ◆ 感情などによって衝動的に物事を進めるのではなく、冷静に考えて行動することで、学力が向上するとともに、人柄も成長できることを学んだ。
- ◆ 今回の授業で学んだことがすべてできたら夢をかなえることもできると思い、わくわくした。



授業前後の生徒アンケート結果※4

「学び方」「考え方」について思考変化が観測された。また、「暗記した正解を答える」ではなく、創造性を発揮するために能動的に動くこともできるようになりつつある。



Vol.16 | 高知県立山田高等学校

香美市土佐山田町に所在する1941年設立の公立高校。「誠実にあれ 誇らかにあれ 貫きてあれ」の校訓のもと、「知・徳・体をバランスよく養い、地域社会に貢献できる人材を育成する」ことを教育目標とし、地域になくてはならない学校として80年以上の歴史と伝統を刻んできた。普通科・グローバル探究科・ビジネス探究科を併設し、地元企業や大学との連携、市長や県へのまちづくり提言なども行っている。

ミネルバ式トレーニングは、「教える」から「聞く」「対話する」「見守る」を中心とした教育へのパラダイムシフトをもたらします。それは生徒一人ひとりの主体性や自律心を育み、学ぶ楽しさと意欲を引き出してくれるのです。

記事で紹介した実証事業の詳細はこちら



1人1台端末と様々なEdTechを活用した新しい学び方はこちら



未来の教室ってなに? 経済産業省の有識者会議「『未来の教室』とEdTech研究会」では、新しい学習指導要領にもとづき2020年代に実現したい「今を前に提しない学びの姿」を、「未来の教室ビジョン」にまとめました。その議論の内容は、ウェブサイト「『未来の教室』の目指す姿」をご覧ください。



「未来の教室」通信

発行：経済産業省 商務・サービスグループサービス政策課 教育産業室 Tel: 03-3580-3922

Facebook: <https://www.facebook.com/METI.learninginnovation/>

公式サイト: <https://www.learning-innovation.go.jp/>

未来の教室 検索

記事の
定期配信は
こちら

